

ラーメンから見る日中関係

インタビュー

井に凝縮する交流 近代化支えた隣国 日本の「食」豊かに

パリやロンドンに行列ができる店がお目見えするほど、日本のラーメン人気はとどまることを知らない。ラーメン誕生に中国はどう貢献したのか、日中関係好転への「隠し味」はあるか。ラーメンをめぐる日中史「Surpui」(スラップ、「音をたててすすろう」の意味)を出版したバラック・クシュナー英ケンブリッジ大学准教授に聞いた。

——なぜラーメンの研究を。

「20年前、岩手県山田町で英語助手をしていた。僕は伝統的なユダヤ系家庭に育ったので刺し身も少しもダメ。魚が新鮮な三陸海岸にいたのに地元の味になじめなかった。ある日、知人が「六文」というラーメン店に連れて行ってってくれた。おいしかったですね。肉好きの僕の舌に合う。深夜12時過ぎなのに店は大繁盛です。聞けば日本中のラーメン店を探訪したり、ラーメン小説を書いたり、日本にはマニアが大勢いるらしい。そこまで日本人をとりこにするこの料理とは何なのか、ずっと気になっていました。ただ東日本大震災の半年後に山田町を再訪したら六文はなかった。津波で不明になった友人もいます。悲しいです」

「日本語を習得し、博士号をとった後の2004年から本格的にラーメンの研究を始めました。いろいろ8年、歴史資料を集め、インタビューもラーメン店主から落語家まで50人はしたかな。すると、このラーメンの井に、日本の近代化プロセスが、そして日本と中国の長く深く豊かな交流が、濃厚に溶け込んでいることがわかってきた。中国人の存在がなければ僕たちはこうしてラーメンをすすっていなかっただけかもしれないし、ひょっとしたら明治維新もなかったかもしれないのです」

——でも明治といえば文明開化。日本が西洋から文化や価値観を探り入れた時代でしょう。

「実はその文明開化を下支えしたのが中国人でした。横浜や神戸、長崎などの開港都市には明治維新に先立つ幕末期から大勢の中国人の商人や労働者、料理人たちがやってきました。欧米の列強諸国は日本との通商拠点を香港や上海に置いてましたから、そうした欧米使節団の通訳をする中国人もいました」

「明治半ばになると中国(清)から留学生がやってきました。その数は日清戦争後に急増しました。なぜ日本が短い間に近代化を成し遂げたのかを学びに来たのです。清政府は奨学金制度をつくり、中国の富裕

Barak Kushner 68年、米国生まれ。留学や研究で日本、中国、台湾に滞在。06年から英ケンブリッジ大学で近現代日本史を教える。

近現代の日中関係史を研究する バラック・クシュナー さん



「ラーメンは東アジアの歴史が溶け込んだ小宇宙です」
＝ロンドン、末盛亮氏撮影

交流機運は戦後も 自己暗示をかけず 学び合う関係築け

「庶民だけでなく知識人の交流も盛んでした。昭和初期までの日本のエリート層は古典の素養が豊かで漢詩を詠む人もいた。日中の知識人同士は筆談で意思疎通できたのです。谷崎潤一郎のように中国に東洋の精神世界の源流を求めようとする人もいた。与謝野晶子、夏目漱石も中国を旅しました。大岡昇平だって若い頃にこっそりラーメンを食べていました。日本人と中国人の間には偏見や誤解もありましたが、お互いに学び合う姿勢が息づいていました」

——そうした日中の交流が第2次大戦で途絶えたのです。

「いや、戦後のラーメン復興にひと役買ったのが中国からの引き揚げ者のラーメン屋台でした。食糧不足の解消に米国は大量の余剰小麦を日本に送ってパン食を広めようとしたが、日本の台所にはオーブンがないから普及しない。小麦を活用すべく、インスタントラーメンを開発したのが台湾生まれで日清食品を創業した安藤百福でした」

「日本が降伏して中国の国民党を率いる蔣介石は『敵は(日本の)軍閥であって日本人ではない』と演説して報復の連鎖を止めた。国際法を順守する政権をアピールする狙いもありましたが、国家建設のためには日本の協力を必要としていたからです。そうした事情は中国共産党も一緒。国民党ほどではありませんでしたが、共産党にも日本で教育を受けた幹部はいました。空軍創設にあたって日本の元軍人の協力を得たことも知られています。日本と良好な関係を築く機運は、1957年に親米一辺倒の岸信介内閣ができ、58年に長崎市内の展覧会で中国の国旗が日本人によって引き下ろされる事件が起きるまで続いていたのです」

——でも今の日本と、中国など近隣国の関係はお寒い状況です。

「終戦後、日本という『帝国』の崩壊は、国民国家の出現などの形で近隣アジア諸国に大きな影響を及ぼしました。しかしその過程で、領土など法的問題は十分に交渉されずに積み残しになった。日本には対外関係は米国に任せておけばよいという空気があり、そのうち高度経済成長に突入して忘れてしまいました。それが近年の中国の台頭で再び持ち上がったのです。帝国崩壊の後遺症が

取材を終えて

一緒に行ったロンドンの豚骨ラーメン店ではポーランドの青年が巧みな手さばきで麺をゆでていた。「最近の日本で日本人が作るものを真の日本食とみなす風潮がある。間違っただけの純血主義です」。外の文化を柔軟に受け入れて発展した日本という自画像を受け入れられるか。そこにも日中理解への力加がありそうだ。(ヨーロッパ総局長・沢村直)